

# NCC 宣教宣言 2019

## 1 はじめに

日本キリスト教協議会(National Christian Council in Japan: NCC)は、創立 70 周年を覚えつつ、2019 年 7 月 14 日 から 16 日まで、在日本韓国 YMCA アジア青少年センター、日本キリスト教会館を会場に、「NCC 主催・宣教会議」を開催しました。

NCC は、創立 50 周年にあたる 1998 年に宣教会議を開催し「歴史の総括」をすると共に、「宣教と奉仕」及び「信仰と職制」の諸課題を共有しました。ついで敗戦後 60 年にあたる 2005 年に開催した宣教会議では、「辺野古」「憲法」「平和教育」などの緊急に取り組むべき課題を確認しました。このように NCC は、一貫して「いのちの痛み」に共感することを大切に、社会の課題を教会の祈りとしていく働きを深めてきました。

2005 年以降、東京電力福島第一原子力発電所事故災害をはじめとして、経済格差による女性や子どもたちの貧困、ヘイトスピーチによる差別・人権侵害の深刻化、集団的自衛権の行使容認にはじまる政府のさらなる右傾化、辺野古・高江での国家権力の行使、テロという言葉によって他の宗教に向けられる偏見など、私たちを取り巻く課題は山積み続けています。教会の中でも、高齢化と担い手の人数の減少、リーダー層の世代交代といった現実的課題を抱え、NCC においてもエキュメニカルな働きに携わるメンバーが少なくなってきました。

しかし、このような時代であるからこそ、今一度、日本におけるエキュメニカル運動の歩むべき道筋を共に確認するために、私たちはこの「宣教会議」を開催しました。

NCC 第 40 回総会期の主題聖句でもある、「平和のきずなで結ばれて、霊による一致を保つように努めなさい。体は一つ、霊は一つです。それは、あなた方が、一つの希望にあずかるようにと招かれているのと同じです」(エフェソ 4:3-4) というみ言葉に導かれ、私たちはいま、ここに集められました。

キリストに呼び集められた者たちが、初代教会より大切にしてきた〈み言葉〉〈奉仕〉〈証し〉〈祈り・礼拝〉〈交わり〉という包括的宣教を大切にしながら、今の時代を生きる私たちに、何が求められ、どのような交わりを創り出していこうとしているのか、そのために私たちがどのように手をつなぎ、歩んでいけるのかを、熱心に語り合った宣教会議となりました。

## 2 〈み言葉＝ケリュグマ〉－み言葉に聴き、伝えること

今回の宣教会議において、私たちは、使徒言行録 1 章 8 節に示された「地の果て」こそが、全世界(オイクメネー)に向かって目指すべき宣教の現場であることを確認しました。「オイクメネー」とは、いと小さき存在が虐げられ、また声を失い忘れられやすい不条理の世界であると同時に、「神の宣教」が聖霊によって、力強く、人々の叫びから開始される場でもあります。私たちが今回、学んだことは、教会は「地の果て」のただなかにあり、「教会の宣教」と「宣教の現場」は、ダイナミックにつながり、不可分の関係にあるということでした。神がアモスに「見よ、その日が来ればと 主なる神は言われる。わたしは

大地に飢えを送る。それはパンに飢えることでもなく 水に渴くことでもなく 主の言葉を聞くことのできぬ飢えと渴きだ」（アモス 8:11）と語りかけたように、今、私たちの教会が直面する危機とは、「宣教の危機」であり、教勢の低迷や財政難よりも「主の言葉」によって示された目指すべきところを見失ってしまっていることに気づかされたのです。

私たちの「宣教・伝道」(mission and evangelism)の原点は、神の「み言葉」(ケリユグマ)に聴き、伝えることにあります。今回の宣教会議では、人々の痛みの現場に出かけて行き、その「場」でみ言葉に聴き、そこで聴こえてくる聖書の響きを共有することの大切さが語られました。さまざまな困難な状況にある現場の課題を神学化し、日々の教会生活に根差しつつ実践することが、私たちのエキュメニカル運動の大きな課題であることも、あらためて確認されました。

### 3 〈奉仕＝ディアコニア〉－世界、社会の必要に応え仕えること

私たちは、この世界、社会の必要に応え仕えるよう、神から派遣されています。この「奉仕」(ディアコニア)の働きが、私たちの宣教の根幹であることは言うまでもありません。

今回の宣教会議においては、NCC につらなる諸委員会、各部からの具体的な活動報告を聞くことができました。それらはいずれも、福音のみ言葉を土台として、神のみ心にかなった世界を実現することを願い、人間としての当然の尊厳や権利を奪われ、苦しみの叫びをあげている多くの人々と連帯して、祈り、働くものでした。

激しい弱肉強食社会の中で、孤立させられている青年たちの心のうめき。障がいや理由に生きることを否定されたいのちの叫び。生産性を物差しとして人間としての尊厳を奪われた人々の叫び。犠牲にされてきた沖縄の平和の叫び。核の脅威に晒される人々の叫び。自然環境破壊や気候変動による被造物や大地の叫び。不都合な真実を隠蔽しようとする国家の原子力(核)政策の下で健康を損なわれた福島をはじめとする諸地域の人々や子どもたちの叫び。平和、環境、人権はつながっている課題です。性の多様性をも神の美しい創造として受け止められないこの世界と教会の頑なな差別によって傷つけられた LGBT セクシュアル・マイノリティーの人々の叫び。戦後の解消されなかった民族差別と日朝関係の緊張に翻弄され、ヘイトスピーチという人種差別に痛み、民族教育を妨げられた在日韓国・朝鮮人の子どもの叫び。何百年に及ぶ部落差別の不条理によって、今も結婚・就職に深刻な影響を受けている人々の叫び。低賃金労働力としてこの国の産業構造に引き込まれた在日外国人の人々の叫び。戦時下で旧日本軍により「慰安婦」とされた女性たち、今も平時性暴力に苦しむ女性たちの叫び。徴用工にされた人々の叫び。私たちがまだ聞き取ることができていない「叫び」が続いているのです。

これらの叫びを前にして、私たちは沈黙することは許されません。私たち日本のキリスト教会、キリスト者は、彼／彼女らの「隣人」となり得ているかが、常に問われているのです。

#### 4 〈証し＝マルトゥリア〉－生活の中で福音を具体的に証しすること

今回の宣教会議の中で私たちは、多くの、日々の生活における福音の具体的な「証し」（マルトゥリア）に耳を傾けました。それらの「証し」は、イエスがその生涯を通して示された喜びの知らせへの応答であり、イエスの「証し」と呼応するものでした。

天皇の代替わり後、目前に大嘗祭を控えています。この代替わりの一連の動きは、政治権力が宗教化し人々の内心の自由を脅かす出来事となっています。つまり、日本国憲法に保障された「政教分離」原則と「信教の自由」、そして「主権在民」が脅かされています。とりわけ、私たちキリスト者にとって「政教分離」原則と「信教の自由」の二つは、根幹的なものです。日本の諸教会は、それぞれかつての侵略戦争に教会として加担した責任の告白を行って来ました。80年前の宗教団体法成立時に、兄弟姉妹の教会を切り捨てて、生き延びた事柄に向き合うことの重要性も指摘されました。この教会の戦前の国家神道への屈伏に対する反省の「証し」（マルトゥリア）と呼応しつつ、NCCも「靖国神社国営化法案」に反対し、日本国憲法の政教分離原則に立つ信教の自由を守る取り組みを担ってきたのです。それが、1970年代以降、韓国NCCをはじめとする韓国キリスト者の民主化闘争への積極的な連帯、さらに1980年代には、朝鮮半島の平和統一による北東アジアの平和を目指した「東山荘会議」への尽力につながっていきます。まさに、アジアからの叫びによって、NCCは、朝鮮半島をはじめとするアジアと向き合うアイデンティティを確立する契機を与えられたと言えます。再び子どもたちを戦争協力への道に導くことがないように、正しい歴史認識を持ち、国家主義教育を克服し、アジアの一員として生きる自覚へと導く教育を持つことが求められているのです。さらに私たちは、神の創造のわざに従い、和解の務めも負っていることを覚えます。

私たちは、正義・平和・いのちの「証し」をしていくことを確認しました。

#### 5 〈祈り・礼拝＝レイトウルギア〉－祈り・礼拝すること

諸教会は、教理や信条において未だ大きな違いと隔たりを抱えていますが、私たちは、その現実を超えて、いと小さき存在の叫びに連帯する中で、共に祈り、礼拝をささげ、連帯の輪を広げています。今回の宣教会議においても、私たちのエキュメニカル運動において、「共に祈り・礼拝すること」（レイトウルギア）は、その本質的要素であることを確認しました。教派の違いを超えて、宣教における一致の実を結ぶ上で、いのちの叫びに対して、宣教の課題として共感、共鳴、そして連帯していくことは、きわめて重要な意義を持っています。

そして、この礼拝の意義を踏まえつつ、私たち日本の教会が「礼拝」を考える時、決して忘れてならないことはかつて誰を礼拝するかを曖昧にし、天皇制国家への親和性を示すために宮城遥拝を行い、それによってアジアへの侵略に加担した歴史です。

「礼拝」は、そこに誰が、どのように集まり、どう交わり、何を聴き、何に促され、何を祈り、何について祝福しているのかが表示される場です。つまり、そこにどれほど多様なものが包摂されているのか、逆に、何が排除され均質化されているか、ということが明らかになる場であるとも言えます。今回の宣教会議では、私たちは、異なる神学、異なる立場との対話を、いつ、なぜ止めて切り捨ててしまうのかが問われました。誰が礼拝にい

ないのか、誰が礼拝の場で抑圧され、傷つけられているのか、私たちの礼拝は問われています。

今回の宣教会議でも、賛美歌だけではなく、説教の言葉、祈りの言葉、礼拝の中で発される言葉が、排他的ではないか、暴力的ではないかを問いつつ、丁寧な吟味と新しい言葉創りの努力を止めてしまってはならないことが確認されました。

## 6 おわりにー〈交わり=コイノニア〉ー主にある交わり、共同体となること

私たちの宣教・伝道とは、聖霊の助けと導きを信じ、「み言葉」（ケリユグマ）、「奉仕」（ディアコニア）、「証し」（マルトウリア）、「礼拝」（レイトゥルギア）において、見失ってはならないオイクメネーの「地の果て」からの〈いのちの叫び〉に丁寧に聴き、そこで私たちを待っておられるイエス・キリストを目指し、そこに遣わされることにあります。

私たちは、この時代、何よりもこの宣教・伝道の使命を再確認し、またそれをさらに深めていくこと、聖霊に導かれ、一つひとつを超えて互いにつながれて、「神の宣教」のために働く「主にある交わり、共同体」（コイノニア）となることを、ここに宣言します。社会派か福音派か、という二元論に陥ることなく、人間の生のすべての領域に関わる喜びと解放の課題について共働していくエキュメニカル運動でありたいと願います。マイノリティを孤立させず、多文化共生社会の実現を目指すことが、エキュメニカル運動の課題です。

私たちはこれまでの宣教会議でも、女性は宣教の客体ではなく「主体」であることを確認してきました。また、これからの私たちの「コイノニア」は、女性というカテゴリーに留まらず、あらゆる世代、ジェンダー、セクシュアリティに属する人々が「主体」でなければなりません。

日本におけるキリスト者はその人口の1%以下ですが、聖霊に押し出され、自己保存的な志向から解放されて、常に開かれた共同体、より包括的な共同体でありたいと願います。今回の宣教会議でも、少数者であるからこそ、日本にはエキュメニカル運動が必要であることが確認されました。開かれた共同体として、カトリック教会、日本福音同盟をはじめとする諸教会、諸宗教、諸団体との広がりある連帯を願います。限界ある不完全な私たちであることを自覚するからこそ、私たちは「塩で味つけられた言葉」をもって、他者との連帯と共働を喜ぶのです。

「わたしの恵みはあなたに十分である。力は弱さの中でこそ十分に発揮されるのだ」（コリントⅡ12:9）とパウロが聞いたキリストの福音に私たちも立ち帰りたいのです。

2019年7月16日

NCC 主催・宣教会議

## NCC 宣教宣言 2019：リタニー 共働を願い、聖霊を求める祈り

あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける。そして、エルサレムばかりでなく、ユダヤとサマリアの全土で、また、地の果てに至るまで、わたしの証人となる。  
(使徒言行録1章8節)

私たちは「み言葉」を求めます。  
み言葉によって私たちのゆくべき道を示してください。

私たちは「み言葉」を求めます。  
み言葉によって、私たちを解放し、あなたの示す地へ向かわせてください。

私たちは「み言葉」を求めます。  
み言葉によって、私たちの心を燃やし、主にある奉仕を担う者としてください。

私たちは「奉仕」を担います。  
「いのちの痛み」に共感し、共に「痛み」を担う奉仕へと遣わしてください。

私たちは「奉仕」を担います。  
「地の果て」から発せられる「叫び」を聞き、「叫び」のある場へと遣わしてください。

私たちは「証し」します。  
イエスの生涯によって示された「正義」と「愛」の言葉を発する者としてください。

私たちは「証し」します。  
日々の生活、いのちのすべての場において「福音」を証しする者としてください。

私たちは「祈り、礼拝」します。  
互いの違いを認め合い、共に神の前に立ち「祈り、礼拝」する者としてください。

私たちは「祈り、礼拝」します。  
「言葉」によって他者を傷つけ、排除することのないよう、礼拝の言葉を整えてください。

私たちは「交わり」を喜びます。  
「神の宣教」を担うため、呼び集められた者として、共働の交わりを喜びます。

私たちは「交わり」を喜びます。  
私たちの「交わり」が開かれたものでありますように、今ここにいない者たちを覚え、共働の喜びを広げていくことができますように。

私たちは「聖霊」を求めます。  
聖霊により、私たちを押し出し、「地の果て」にある「出会い」へと遣わしてください。

(全員で)私たちは「聖霊」を求めます。(それぞれの言語で)

※この祈りは、宣教宣言 2019 を内在化させるために、宣言の一部としてつくられました。教会や様々な集まりの中で用いてください。